

『門』小論  
—宗助に見る他者性の揺れ—

台湾大学 林京華

早い時期に、畑有三氏（1969）<sup>1</sup>がその論稿「門」の中に、〈象徴性〉を『門』の基本的な構造として提起し、「相対化」を作品へのアプローチとして示唆した。更に宗助と御米の家という空間の〈内／外〉を象徴的に読み、〈社交嫌い〉な宗助と〈世間の広〉い坂井のやり取りを例として〈内／外〉の関係を説明した。その後の空間に関わる論説においては、大抵『門』の空間叙述の〈象徴性〉を掘り下げて、宗助と御米の関係の有様<sup>2</sup>や宗助と御米を一体視した上で〈他者〉と見なした小六<sup>3</sup>を論じるものが多い。

本論は畑有三の説を踏まえ、〈空間〉及び〈象徴性〉を帯びる〈内／外〉の相互関係を、〈内〉に当たる宗助と〈外〉に当たる坂井ないし〈社会〉の〈コミュニケーション〉として読む。更に、宗助の〈他者〉への意識と、それを通して自己省察の変化を捉えることを試みたい。（373字）

---

<sup>1</sup> 畑有三（1969）「門」『国文学解釈と教材の研究』14（5）学灯社 P.86

<sup>2</sup> 小泉浩一郎（2008）「夏目漱石『門』一つの序章（上）（下）—男性の〈孤独〉をめぐる」『東海大学紀要文学部』（89）（90）東海大学出版会

<sup>3</sup> 多田道太郎（1978）「昔、ちゃぶ台というものがあつた」『風俗学』筑摩書房